

菌茸

きんじん



第65巻 1号 通巻760号

目次

- 02 菌糸紋 新年のごあいさつ
- 04 表紙のきのこに寄せて ホコリタケの仲間
- 05 産地情報 大分県下における中低温性品種菌興240号の秋子発生状況
宮崎県下における中低温性品種菌興240号の秋子発生状況
門川町の安田初美さんの栽培事例
- 11 獣害対策 原木林のニホンカモシカ被害対策 長野県駒ヶ根市の水上積善さんの事例紹介
原木シイタケのサル被害対策 宮崎県延岡市北方町の甲斐康美さんの事例紹介
- 17 栽培技術 1～3月の原木シイタケ栽培管理
- 27 市況 全農乾シイタケ情報
- 30 お知らせ 鳥取県産原木しいたけ「とっとり115フェア」開催案内
2019年度きのこ栽培担い手養成研修生を募集します
- 34 各地のきのこだより



新年のごあいさつ

一般財団法人日本きのこセンター 理事長 つね常 だ田 たか享 よし詳



平成31年、己亥の年頭にあたり謹んで初春の祝詞を申しあげます。己亥の年は「次の段階を目指して内部の充実を心がける年」とされています。本年が農林家の皆様および中山間地域の循環型農林業にとりまして、新たな飛翔に向けたエネルギーをしっかりと蓄積できる年になることを心より祈念いたします。

平成30年の世相を表す漢字に「災」が選ばれましたとおり、昨年は、北陸地方を中心とした大雪や日本列島各地での猛暑、西日本を襲った記録的豪雨、大型台風の襲来、さらには噴火や大きな地震など、自然災害の脅威に強い国土づくりの重要性を痛感した年でした。被災地および被災された方々に衷心よりお見舞い申しあげますとともに、一日も早い復旧と日常生活の復活を祈念いたしております。

平成のきのこ栽培を俯瞰すると、栽培規模の大型化と小規模経営者の廃業とが進み、生産形態は家族労働による生産から大企業による工業的生産へ、生産の場は里山から町へと移行し、効率化によるコストの削減により単価はむしろ下落しました。また、生産性の向上を図るために、コーンコブミールなどの輸入資材が栽培に使用されるなど、きのこ栽培の場および資材が里山から離れつつあります。

昭和から平成にかけて日本のきのこ産業を牽引してきた原木シイタケについては、その生産が大きく縮減し、菌床シイタケの生産が拡大しました。また、輸入生シイタケが激減した一方、輸入菌床を用いて生産されたシイタケ（推定3千トン、生重）が国産シイタケとして流通しています。私どもは輸入菌床から発生したシイタケの生産履歴を消費者にわかりやすい表示にするよう国に働きかけているところです。

里山の荒廃やきのこ原木栽培の衰退に象徴されるとおり、平成年間は地方の過疎高齢化が加速し、平成27年時点で全国に限界集落が1万5千以上、耕作放棄地面積（42.3万ha）が農地面積（450万ha）の9%にまで増加しました。まさに上流の「山河は破れ」

かけています。

日本きのこセンターは「国あって山河なし」とならないよう、子や孫が故郷に帰りたくなるような元気な地方の創生にきのこを通して寄与していくことが責務であると考えております。来年度から施行される森林環境譲与税を里山におけるきのこの持続的生産体制の構築に向けて活用できるよう提案するとともに、地域資源を活用した循環型きのこ栽培を「不易」、きのこ種や栽培技法を「流行」として、「不易流行」の精神で、地方創生に資するきのこに関する応用研究を全力で実施する所存です。具体的には、きのこ栽培を里山の魅力ある主幹産業として再興するために、所得の向上に有効な原木シイタケのブランド化や複数のきのこの複合経営を支援・提案するとともに、ブランド力をさらに強化した品種の育成、きのこの健康機能性成分に関する研究、食用・薬用きのこ類の栽培実用化研究等を推進し、健康の維持増進に効果的なきのこ類の新たなニーズと里山におけるきのこ産業の創出に向けて役職員一丸となって取り組んでまいります。本年も生産者各位をはじめ行政、関係団体の皆様のなお一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申しあげ、新年のごあいさつといたします。



ホコリタケの仲間

牛島秀爾



きのこの季節は少しお休みモードと思われるかもしれませんが、鳥取では毎日どんよりした灰色の雲と雨や雪の影響で地表付近の湿度もあり、落葉・落枝などを栄養源とする腐生性のきのこには好都合かもしれません。目を凝らして落ち葉の間などを見てみましょう。冬になるとエノキタケやヒラタケの発生が本格的に始まります。12月下旬時点では、エノキタケやヒラタケ、キクラゲ、アラゲキクラゲの発生が頻繁にあり、海岸クロマツ林に行くと稀にショウロが顔を出していたり、苔の間からは苔と関連すると思われる種類のきのこの発生がありました。

菌茸研究所近辺の林では、この時期になるとアカチシオタケやキクラゲなどを良く目にしますが、今回は落ち葉をかき集めた場所に高さ6cm前後のホコリタケの仲間 *Lycoperdon* sp. が発生していました(図1)。落葉などを分解して栄養にする腐生性きのこです。一般的なホコリタケよりもやや濃い褐色です。クロホコリタケというものがありますが、亀甲模様のようなものは見られませんでした。表面には無数の円錐形の細かい棘があり、次第に脱落して白抜けになります。成熟すると頂部に孔口が開いて、外からの物理的刺激によって無数の担子孢子が煙の様に吹き出します(図2)。顕微鏡で孢子を観察したところ、孢子は類球形で棘があり大きさは直径4 μm前後でした(図3)。

(菌茸研究所、主任研究員)



図1. 孔口が開く前

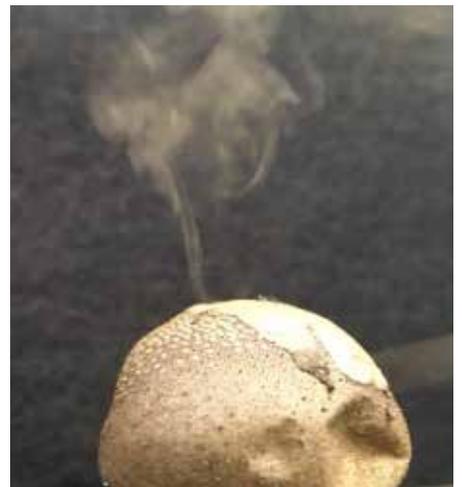


図2. 担子孢子の噴出

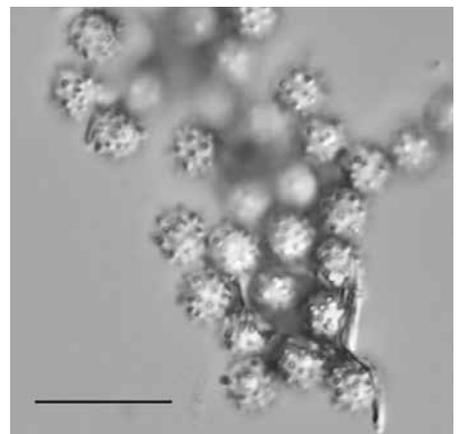


図3. 担子孢子(スケール10μm)

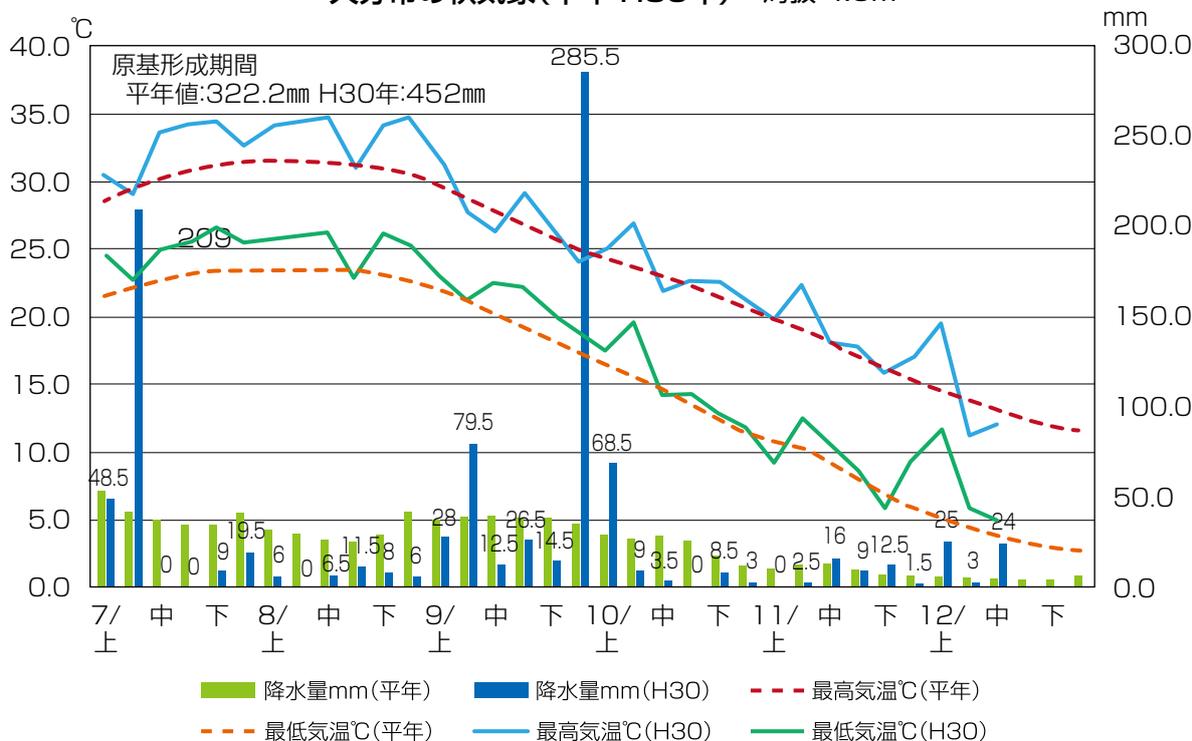
大分県下における中低温性品種 菌興240号の秋子発生状況



菌興240号は、平成20年から原木シイタケの中低温性品種として全国で広く使用されており、以来10年間、秋・春用品種として大分県下においても高い評価を得ています。品種特性として、一番は栽培のしやすさ(ほだ付きが良い、ほだ場環境の適用範囲が広い、新ほだ木の発生率が高い)に加え、品質面では大型厚肉でくっきりした隣皮と縁巻が強いことなどが大きな特長です。

平成30年夏期の気象の特徴として、梅雨明け(7月9日)後約2カ月間ほとんど降雨の無い高温気象が続いたため、「硬ほだ」が心配されましたが、反面「腐朽温度」は十分確保でき、またその後の原基形成期間中での降雨量も平年値をクリアー(450mm=140%)しました。11月に入ると、ほだ起こし操作の目安となる最低気温10℃以下の日が続く、標高差無く(海拔50mから700m)2年ほだ木は勿論3年ほだ木もほぼ同時期に芽切り始め、11月中旬には採取ピークを迎えました。また採取後半の降雨効果で12月初めに2回目の採取ピークとなりました。葉筋は中葉サイズ以上で縁巻も強く、「ゆっくり採取・生産できる」ことも好評価となっています。

大分市の秋気象(平年・H30年) 海拔:4.6m



月	7	8	9	10	11	12
平年降水量mm	243.5	185.9	228.8	139.3	59.4	30.5
H30降水量mm	286.0	38.0	446.5	92.5	41.5	
平年比	117.5	20.4	195.1	66.4	69.9	

2年ほだ木



標高600mのヒノキ林北西面のほだ場。今シーズン2回目の収穫中（追い芽も確認できる）。
12月12日（竹田市）



標高200mのスギ林東面のほだ場。今シーズン2回目の収穫終了（3回目の芽切り始まる）。
12月15日（豊後大野市）

3年ほだ木



標高700mのスギ林南西面のほだ場。今シーズン2回目の収穫中(追い芽も多い)。 12月14日(九重町)



標高600mのスギ林北西面のほだ場。今シーズン2回目の収穫中(同時に追い芽が始まる)。 12月13日(竹田市)

(九州大分事務所)

宮崎県下における中低温性品種 菌興240号の秋子発生状況

門川町の安田初美さんの栽培事例



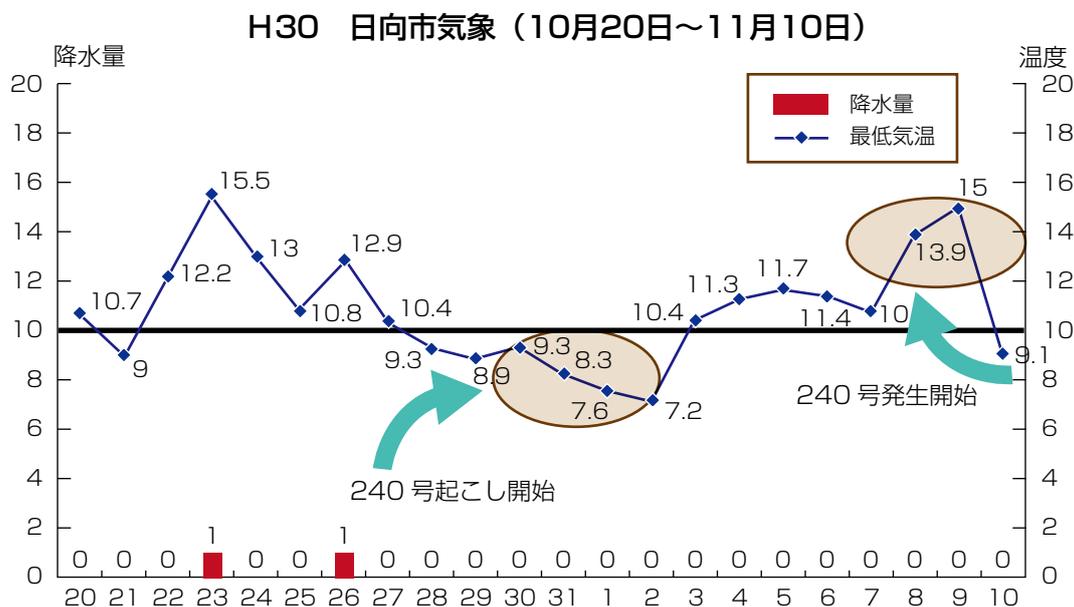
宮崎県門川町の安田初美さん（65歳）は、会社勤めをしながら長年原木シイタケ栽培を行ってきましたが、3年前に会社を退職してから本格的に栽培に取り組んでいます。

安田さんの栽培形態は次のとおりです。

- ・ 労力：本人と奥さんの2人
- ・ 年植：約2,500本～3,000本
- ・ 種菌：菌興240号のコマ菌を使用（数量は約7万個）
- ・ 伐採：適期伐採を重視し、10月下旬～11月上旬に伐採
- ・ 樹種：クヌギ70%、コナラ30%（立ち木購入）
- ・ 伏せ込み：明るい林内伏せ込みでほだ木作り
- ・ ほだ場：ハウス2棟と林内ほだ場を使い分けている

宮崎県でも菌興240号が定着し秋子の発生を心待ちにする生産者が多くなっています。平成30年秋子は前年の秋子と比較すると、2倍近く収量があったと言う話が多く聞かれています。しかし、発生操作をする時期によって秋子の収量に明暗を分けたように思われます。品種のきのこ発生に関わる最低気温を確認して、その気象にあわせて確実に発生させているのが、今回、紹介する安田初美さんです。

では、安田さんの240号の発生状況と気象の流れをまず見てみましょう。



安田さんの本年の240号の起こし木は約2,500本で、その内の半分のほだ木は図1のようにのハウスに持ち込み、残り半分は図2に示す林内のほだ場に持ち込みます。10月28日頃から最低気温が10℃を下回り始めたので、10月31日～11月2日にかけて遮光ネットを張ったハウスに持ち込み、即散水を8時間程度3日間行いました。通常ならもう少し散水を控えるのですが、今年の起こし木は降雨が少ない環境にあり、ほだ木が軽かったので、通常より散水時間を長めに行いました。

その後、11月5日頃から発生が始まり、11月9日に1回目の収穫のピークを迎えました。今回のハウスでの新ほだ木からは約70Kgの乾シイタケが収穫されました。ほだ木1,000本当たり25kg前後と平均的なほだ木一代発生量の半分近くを採ったこととなります。

2回目の発生も12月上旬頃から見られ、1回目に多発したので芽数は少ないものの、しっかりとしたシイタケに生育しています。現在は、生シイタケを中心に、直売所などで高値販売しています。

林内ほだ場に起こした残り半分の新ほだ木は、起こし時期が少し遅れて11月中旬にずれ込み、散水施設が無いため芽切りを促すための散水ができなかったが、12月上旬のまとまった降雨と、気温上昇で一斉芽切となり、バレ葉中心となったが、収量はハウスと同じぐらいの量となりました。



図1. ハウス内発生 (H30年11月8日撮影、標高90m)

とにかく、まずは芽を切らせること、それには必ず訪れる最低気温を見極めて発生操作を行うことが大切です。次に生長温度を確保できるほだ場にすることが重要と考えています。

240号の場合、初回発生 of 生長温度の確保は何ら問題ありません。芽切り開始が10月下旬から11月ということもあるので、生長温度は確実に確保できます。問題は2回目以降です。2回目の芽切りは

12月～1月が中心になるので、その時にほだ場の温度が13～18℃前後の生長温度を確保することが重要になります。

その対策として安田さんは、ほだ場を明るくしたり、ハウスの導入に挑戦しています。ほだ場を明るくすることで、冬期間でも少しではあるが、定期的に採取できるようになります。明るくすることで、当然湿度との関係もありますが、ほだ場やほだ木の温度をきのこの生長に必要な温度に保ちやすくなります。安田さんはほだ場の改善とハウスの設置、そして菌興240号の導入で秋～冬～春までの6カ月間シイタケが採取できる栽培環境を整えています。



明るくしたほだ場



新設ハウスと自作の中古ハウス

(九州日向事務所)

原木林のニホンカモシカ被害対策 長野県駒ケ根市の水上積善さんの事例紹介

安田修一



1. 水上きのご園と水上積善(せきぜん)さんのこと

水上積善さん(図1)は平成22年に信州大学農学部を卒業、約1年間のサラリーマン生活を経て平成23年の初夏に就農しました。就農と同時に経営移譲を受け、現在は31歳の若き農林業経営者です。シイタケ栽培は平均年植20,000本、周年生シイタケ栽培と乾シイタケの複合経営。原木は、父平八郎さんの時代には主に福島県産のクヌギが主体でしたが、就農時に勃発した東京電力の放射能問題により平成24年以降は一部自伐を含め、県内産原木へ切り替えました。水上さんは就農時から事業推進を行う上で次の2点を大きな柱として位置づけています。



図1. 水上積善さん

(1) 発生舎・休養舎の加温整備をすることにより、夏菌(菌興702号等)の周年栽培の完成。冬期は -10°C とな

るため、12月から翌年2月までの発生が不安定となっており、この点の解消に努めている。現在、発生舎・休養舎6棟とも温湯配管によるインフラ整備を終了している。ほだ木の一代の収量は格段に増加しました。

(2) 原木林の育林。福島県を主体とした東北産原木が壊滅的になった時点で長野県は購入原木の移出県となった。購入原木の渡場渡し価格は年々高騰し、入手困難になっています。今後、16,000~20,000本の定常植菌を計画している以上、原木確保は自伐分を増やすことが急務であり、そのため原木林の育林は不可欠と考えています。

今回は、水上さんが取り組んでいる(2)の原木林の育林について、特にニホンカモシカによる食害対策の概要を紹介します。

2. 原木林育林の取り組み

(1) クヌギ・コナラの混植で危険分散

日本各地において原木林の育林の大きな障害はシカによる新芽の食害であるが、水上さんが暮らす駒ケ根地区ではニホンカモシカ(ウシ科。以下、本文ではシカと略称)による被害が問題となっています。父の平八郎さんはかつて、針葉樹の植林を行うにあたり、混植を行うことでシカの被害を分散化させて

いました。具体的にはヒノキのなかにサワラを混植する方法です。過年度にわたる実証では、サワラ、ヒノキともほとんど無傷でした。経験則によるものだが、サワラをシカが嫌うようだが、サワラ単植だと食害に会うようです（このあたりの詳細は2004年の林業新知識へ寄稿している）。

このことをヒントに、水上さんが育林を始めた平成24年からはクヌギとコナラの混植を行っています。年により被害程度は異なるものの、食害のあった年はコナラに集中しており、クヌギはほとんど無傷であったようです。混植によるシカ被害の危険分散は「今のところ効果があるようだ」と本人は話しています。

（2）シカ被害防止対策～シカの嫌がることを！

植林地には基本的に柵やネット等は張らない。植林後はダンボール(種菌の空き箱等)を敷き、腐葉土をかける(図2)。また、両脇には古マタイ等を敷く。これも経験上の対策だが、シカが植林地に踏み込んだとき足に弾力が伝わり警戒するようだ。図3のように植林した左右横一列に古マタイ等を敷いてシカの侵入防止を図っています。



図2. 植林したクヌギの真下には段ボールを敷き、その上に腐葉土をかける。



図3. シカ被害防止対策として植林した苗木の周囲に古マタイを敷き詰める。フワフワ感をシカが嫌う。

(3) 現在の育林状況

水上さんの7年間の成果は、コナラの萌芽更新で約5ha、クヌギ・コナラの植林(混植)で約2haの合計7haの面積となっている。7年前の萌芽更新分は暖地と同じくらいの成長となっており、あと数年で伐期を迎える。「それを楽しみに管理を行う」、「自分で育てた原木が使える喜び」などが水上さんの原木シイタケ栽培に傾ける情熱のモチベーションとなっています。今後もクヌギ・コナラの混植による育林を拡大していく計画とのことです(図4)。



図4. 奥は既に植林した原木林。手前は植林予定地。植林予定地には肥培管理の一環として、客土した後、土壌改良のため深根性植物であるレッドクローバーを育てる。

(中部駐在)

原木シイタケのサル被害対策 宮崎県延岡市北方町の甲斐康美さんの事例紹介

飯干克己



1. 宮崎県における農林作物のサル被害の状況

宮崎県内でサルによる農林作物の被害が目立つようになったのは、昭和40年代の後半頃からですが、この頃の被害は一部地域に限られていました。

しかし、近年、中山間地域の過疎化等により、県内各地で広範囲に被害が発生するようになり、農林作物の被害は平成3年に初めて1千万円を超えたのを境に、ほぼ毎年増加傾向となり、平成20年に急増し、平成24年には金額ベースで8千7百万円を超える被害となりました。この中に含まれるシイタケの食害も大きく、栽培を中止せざるを得なくなった生産者も多く見られ、同時に産地として消えてしまった地区もあり深刻な問題となっています。現在、県内に98群4,400頭あまりのサルが生息していると推定されています。

2. 甲斐さんならびに北方町における原木シイタケのサル被害の状況

今回、紹介する甲斐康美さん(68歳)は祖父の代から三代続く原木シイタケ栽培農家で、本人は18歳から栽培に従事し今年で51年目となります。家族は奥さんのとしよさんと長女、長男が同居する4人で、現在の栽培規模は年植3,000本前後(全て自家原木)です。以前には延岡市北方町椎茸振興会の会長も務められ、地区を代表する生産者です。

北方町でサルの被害が出始めたのは20数年も前からですが、甲斐さんの住む藤の木地区では被害がなく、いつかサルの群れが山越えして来るかもしれないと恐れていたそうです。そうした中、6年前の平成25年11月にシイタケの収穫を目前に控えたほどに、数十頭の群れが襲来、シイタケは全滅しました。その時は、とうとうこの地区にも来たかと呆然とされたという。

「サルはシイタケを食害するだけでなく、そこそこ食べた後はちぎって割いて投げ散らかすから始末が悪い」と甲斐さん。現在、北方町管内には1群60頭あまりが生息しており農林作物への被害が継続しています。



3. 原木シイタケのサル被害防止対策

サルの襲来後、甲斐さんは即座に対策に乗りだしました。まずは昔から被害のある地区で行なわれている爆音機をほだ場に設置しました。当初は効果があったものの徐々にサルが慣れてしまい被害がでるようになりました。その後、試行錯誤の上、田んぼの周りにイノシシ避けのために張り巡らせていた電柵に着目。電柵に着目した理由は現在、山間部の田んぼには獣害対策として防獣用の金網が無償で提供されており、その金網を申請し田んぼの周りに設置したことで、今まで張り巡らせていた電柵が不要となり、この電柵の有効利用ができないかとの思いからでした。しかし、ただ単にイノシシ用の電柵を設置したのではサルの侵入を防げる筈もなく、電柵にプラスしてスギ、ヒノキの鹿対策として使用されている防獣ネット（高さ2m）を組み合わせて自作した「シカ・サル兼用対策ネット」を設置しました。さらに、サルは樹木の枝伝いに上部からもほだ場に侵入するため電柵から外側に5m幅の樹木を切り開いて空間を設けています。



田んぼの周りは電柵から金網へ交換



鹿用防獣ネット（下部）の上部に不要になったイノシシ用電柵を設置した防護柵



電柵用のガイシはビニールテープで固定



防護柵の外側を5m程切り開く

このような防護柵で対策を講じた後、1度だけサルの被害を受けたことがあったが、それは電柵の電池切れが原因でした。こまめに電池残量のチェック・交換を行なうようにしてからは、サルの群れは度々近くに来るもののほだ場への侵入は完全にシャットアウトできているという。

4. サル被害防護柵設置のポイント

- (1) 下からの進入を防ぐため、ネット下部は地面に金具でしっかり固定する。
- (2) ネットから外側に5m程度の空間を設ける。
- (3) 電池切れに注意。電池は1カ月程度はもつが20日程度で交換した方が安全。

5. 終わりに

甲斐さんのほだ場は全部で3カ所あり、平成26年に1カ所に防護柵を設置、28年に2カ所目へ設置しています。現在、最後の3カ所目の設置に向けて準備中で、今後、3カ所目の設置が済めば完全にサルをシャットアウトできると自信を見せる。

現在、同居している長男（26歳）が将来はお父さんの跡を継ぐと言っており、「先になれば若い者の考えは変わるかもしれないから分からない」と言われるものの、長男のその言葉が甲斐さんの創意工夫とヤル気につながっているのは言うまでもないようです。今後も地区の代表的生産者として栽培を続けて行かれることを願っています。

（九州日向事務所）

1～3月の原木シイタケ栽培管理



乾シイタケ栽培

昨年も、地震、豪雨、夏の猛暑や台風など自然災害が多発した年となりました。地球温暖化により異常気象が恒常化し、本年も極端な気象が訪れないとは言い切れません。雨、雪、低温、乾燥など厳しい気象条件と折り合いをつけながら生産するのが原木シイタケですが、栽培管理は年々難しくなっています。1～3月は、玉切り・集材・植菌・採取と多忙な時期を迎えますが、丁寧な作業を心がけてください。

1. 原木の玉切り・集材

適期に伐採した原木は玉切り時期を迎えています。長期間の葉枯らしは原木表面が過乾燥となり、クロボタケやニマイガワキンの侵入を招きやすくなるため、伐採後30日程度経過すれば速やかに玉切り・集材作業を行いましょう（葉枯し期間は、樹種、樹齢、その年の天候や黄葉具合により多少異なります）。



玉切り作業



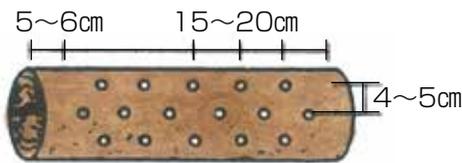
集材作業

2. 植菌

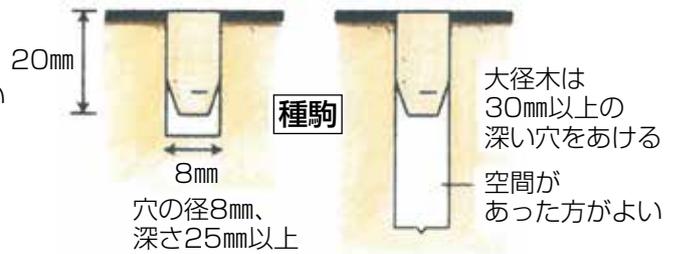
玉切り後は集材して笠木を掛け、直射日光を当てないようにして下さい（下図参照）。直射日光に長時間当たると害菌の侵入や表面硬化の一因となります。集材後はなるべく早く植菌に取り掛かるようにしましょう。



【コマ菌の植菌】

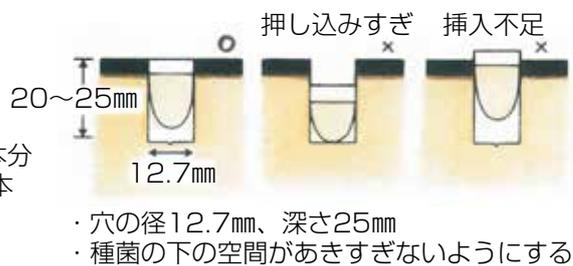
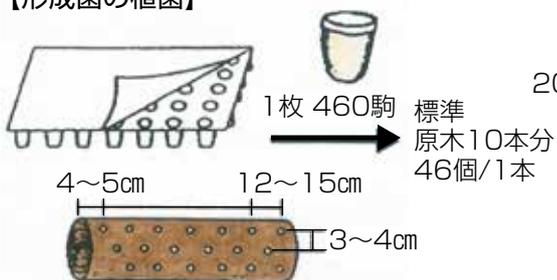


樹皮面から頭を出さない
奥に入れ過ぎない



植菌時期は2~4月、梅の花が咲く頃からサクラの咲く頃が適期
種駒は直径8.0mmの穴をあけ、金づちで種菌の頭が樹皮面より出ないように打ち込む
植菌個数は木口直径 (cm) の2.5~3倍の数が標準

【形成菌の植菌】



＜形成種菌の扱い＞

形成菌は購入後早く（1週間以内を目処に）使用する。
使用するまでは5~15℃の場所で乾燥させないように保管する。

3. 仮伏せ

仮伏せは、ほだ化の良し悪しや発生量、品質などに大きく影響する重要な作業です。

冬期に植菌したほだ木は仮伏せを行い、シイタケ菌の初期活着や伸長を促すようにしましょう。低温・乾燥の条件下では、シイタケ菌が伸長できないばかりか種菌が弱って活着が遅れほだ化遅れの一因となります。特に、種菌の乾燥は禁物ですので注意しましょう。

基本的な作業は、下図のように、ほだ木を30cm程度の棒積みか束立てにし、笠木や遮光ネットなどで庇陰した上からビニールまたはブルーシートで被います（特に、形成菌、オガ菌は保温・保湿を心掛けてください）。ただ、被覆内部の温度が20℃を超えないように管理することが大切です。



4. 寒子・春子対策

暖冬傾向で芽切りが遅れ年内に採取できなかった芽を放置すると、低温や乾燥のために成長できず、春子に悪影響を及ぼします。玉切り・集材・植菌と作業が重なる時期ですが、ほだ場の状況を確認して増収・良品生産の方策として次の管理・操作を実施してください。

- 1) 暗いほだ場は枝打ち・間伐を行い明るくする。春先の芽切りが早くなり、品質向上につながります（図1）。
- 2) 防風垣（ネット）の設置。すでに設置しているほだ場も巡回し、つなぎ目や切れ目から入る風は強力となるため補強、補修を行って下さい。広いほだ場では周囲だけでなく内部にも設置し、ほだ場の保湿、保温に努めましょう（図2）。
- 3) 現在芽切っているものには、袋掛けやビニール被覆を行って積極的に成長を促して下さい（図3）。
- 4) 4年ほだ木以降の古ほだ木は、ナタ目・クギ目を3か所程度入れて水分を給水しやすいようにして春子増収に努めましょう（図4）。
- 5) 散水施設を所有する方は、2月中旬以降に芽切り促進の散水を実施しましょう（図5）。

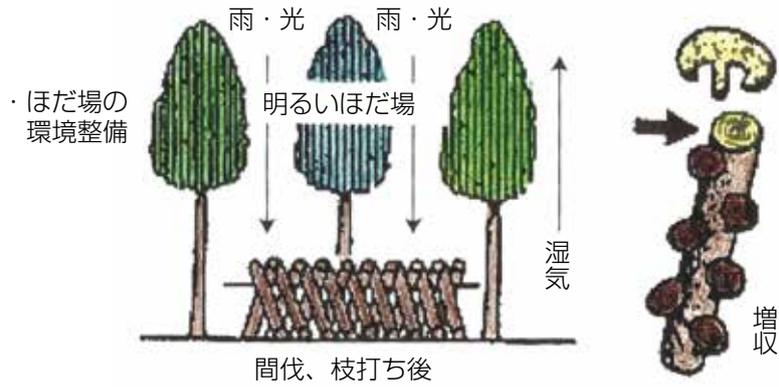


図1. 枝打ち・間伐

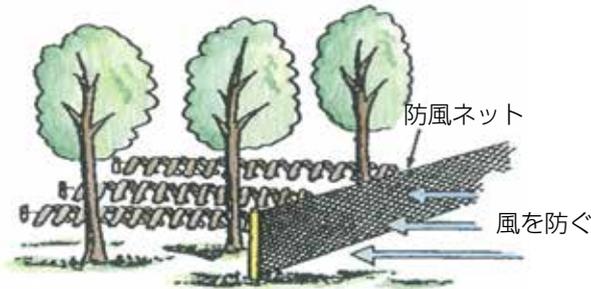
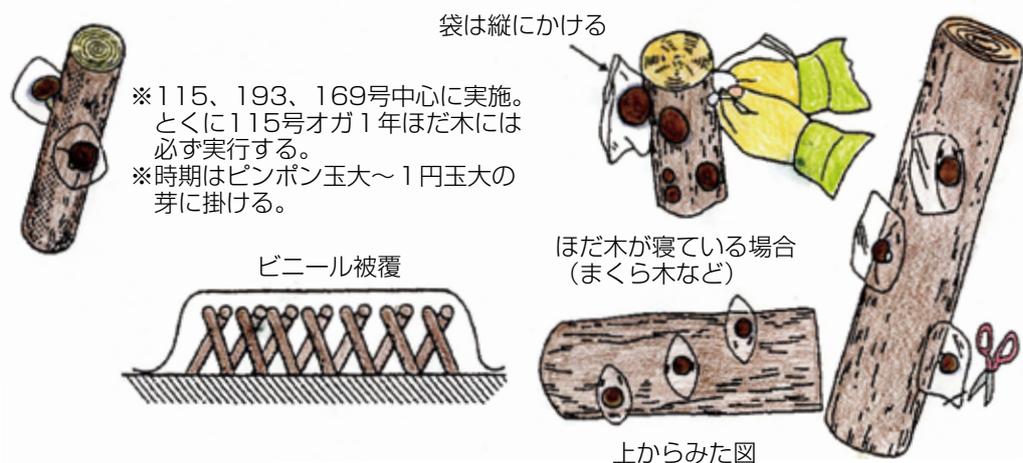


図2. 防風垣（ネット）の設置

袋掛け



※115、193、169号中心に実施。
とくに115号オガ1年ほだ木には
必ず実行する。
※時期はピンポン玉大～1円玉大の
芽に掛ける。

袋は縦にかける

ほだ木が寝ている場合
（まくら木など）

上からみた図

- (1) 袋はきのこの傘とほだ木の間縦にして挟む。
- (2) 挟めないときは、孔の2～3cm上にピンで2カ所を止める。
- (3) ほだ木の裏側は袋に水がたまりやすいので、カドを切るとよい。

図3. 袋掛け、ビニール被覆

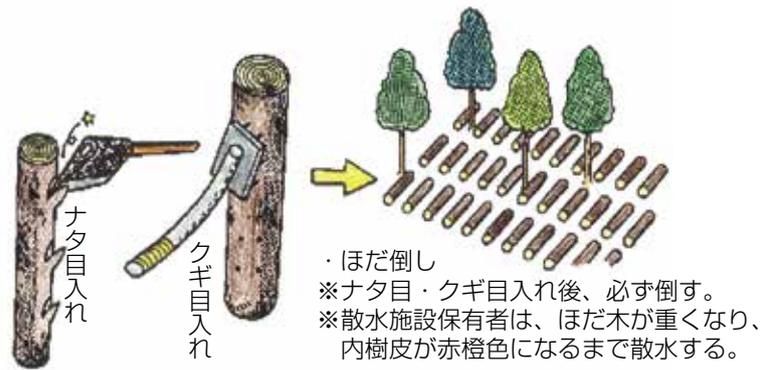


図4. 鉋目・クギ目

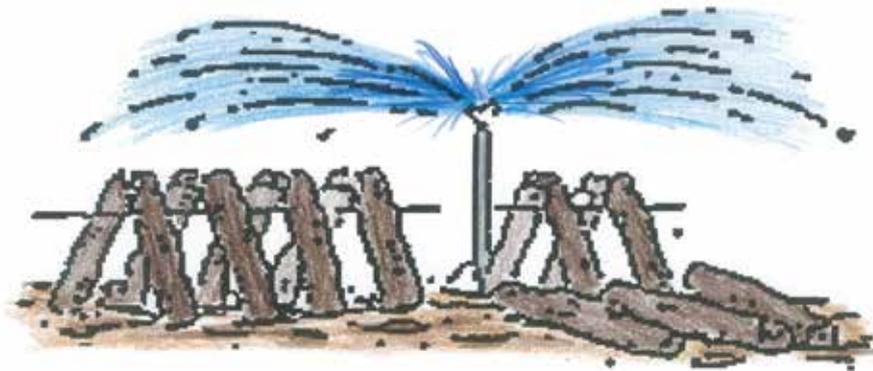


図5. 散水

5. 乾燥機の点検

春子の本格発生に入ってから慌てることのないよう、乾燥機に不備な箇所がないか必ず事前点検を行ってください。また、点検と同時に、食品を扱っているという認識をもち、清掃・清潔に努めましょう。

[点検箇所]

- ①煙突：先端部やつなぎ目のズレ等、正常に取り付けてあるかを確認。
- ②燃料タンク：タンク内のゴミ、水、サビ等の確認。
- ③燃料ホース：油漏れ、ホースの亀裂確認。
- ④電源プラグ、コード：プラグ部の劣化やコードの断線等の確認。
- ⑤エビラ：埃や汚れの多いものは、タワシやブラシ等で洗浄。
- ⑥庫内床面：庫内の床には木屑や虫、塗装片などが落ちているため清掃を行う。
- ⑦炉：穴や亀裂、変形などの確認。
- ⑧バーナー燃焼：着火や燃焼の状態を確認。
- ⑨電源確認：コンセントの差し込みやブレーカーの確認。
- ⑩動作確認：送風機や温度、各設定・動作の確認。

(静岡駐在 小林克孝)

生シイタケ栽培

購入原木による生シイタケ産地の多くが原木流通の悪化等により、今まで以上の安定発生、良品生産に向けて努力をしています。安定発生のためには、ほだ木作りが重要となりますが、近年の異常気象による害菌被害の増加や慣れない県外産クヌギ原木使用の産地も増えています。樹種の特長や品種の特長を十分把握したうえでほだ木作り管理、発生操作を行うことが大切です。

1. 冬菌・低中温菌の浸水栽培（菌興115号、118号、141号）

1月以降の浸水は品種により異なりますが、1回目（拾い込み）終了後もしくは2回目使用となります。一連の発生操作は図1のとおりです。※印にある事柄を特に注意するとともに下記の点について気を付けて行うことが大切です。なお、浸水栽培に使用するハウスは図2のような構造にします。

- ・2～3年ほだ木の浸水時間：1月以降の厳寒期はほだ木の温度が低下するため、長時間浸水や水温を上げ給水し易い環境を作る。古ほだ木の発生不良の多くは、給水量不足が要因となります。
- ・成長温度：厳寒期のハウス内温度管理は記載した温度であるが、近年3月以降は急激な温度上昇が多いのでハウス栽培においては庇陰調整が重要です。
- ・使用後の管理：使用後ほだ場にて春子発生採取を行う場合は3月中旬までにほだ場に返す。その際、浸水もしくはほだ場での散水を行うことにより春子発生量を増収させることができます。

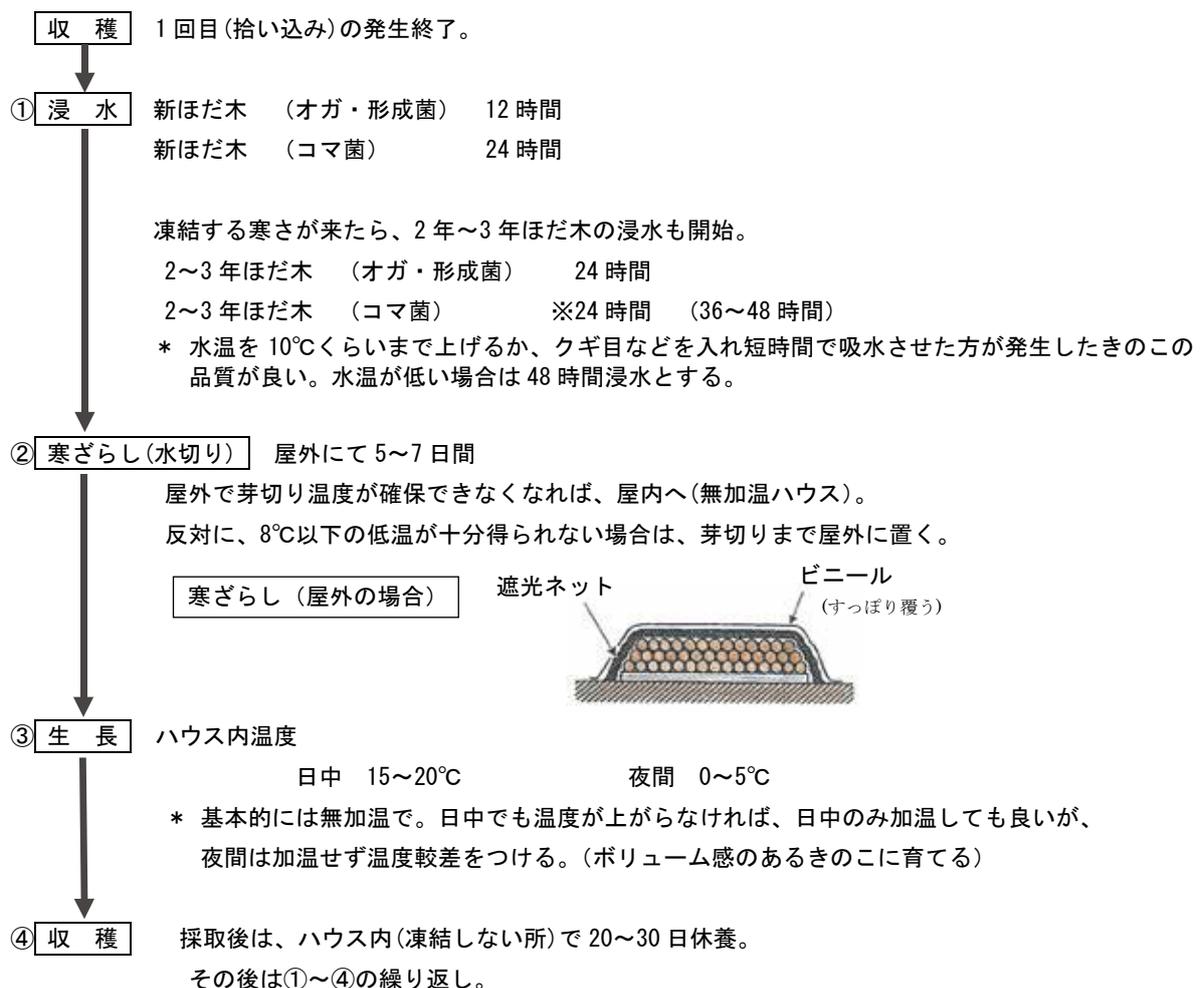
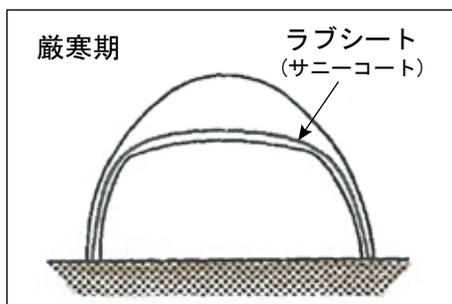
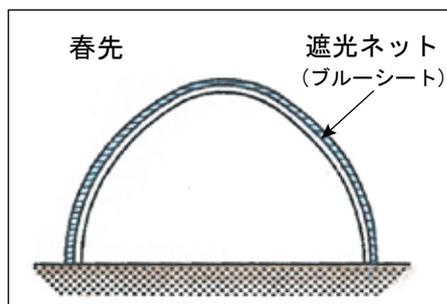


図1



内張りで庇陰調整を図る。
 厳寒期、成長温度が確保できない時はビニールやサニーコートなどで2重張りにする。



降雪の心配がなくなったら屋根に遮光ネットを張る。
 (降雪が心配な場合ブルーシートを掛ける)

図2

【115号・118号ハウス散水無加温栽培の事例】

9月～10月に原基作りの散水を行い、12月以降はゆっくりと成長させ特選物(ジャンボシイタケ)として出荷します(下の表ならびに図3、4、5を参照)。

散水(目的と方法)

散水	予備散水	原基作り				芽切促進	成長促進	追い芽促進
目的	ほだ木を柔らかくする	しっかりとした原基を作る				原基を芽切らせる	シイタケの成長を促す	分散発生
時期	8月中旬	8月下旬～10月上旬				10月中旬以降	芽切から採取前まで	採取後半
時間の目安	3～4時間	週1回24時間				3～12時間	1～2時間	8～12時間
散水後のほだ木吸水量(ほだ木、10cm×90cm)		ほだ木年齢	2年ほだ木	3年ほだ木	4年ほだ木			
		散水後重量	5.2～6.2kg	5.0～6.0kg	4.7～5.7kg			
注意点	夕方2～3日おきに散水。古ほだは天地返し、ほだ回しを実行する。	<ul style="list-style-type: none"> 最高気温が25℃以下になってから散水開始 総散水量400mm程度の散水 ハウス内本伏せについては9月上旬まで腐朽優先の予備散水とし、原基作り本格散水は9月 				2～3日連続	2～3日間隔、芽が湿るくらい	2～3日連続



図3. 散水は原基作り、成長促進等に活用



図4. 厳寒期はハウス内にてビニール被覆



図5. 保温・保湿を行い良品に育ったきのこ

2. 夏菌・高中温菌の浸水栽培（菌興697号、702号、537号）

冬期使用の夏菌の1・2年ほだ木は、2回目以降の発生となります。夏菌の安定発生を行うためには温度管理を徹底することであり、品質向上のためには明るいハウス環境を作ることも重要となります。

- ・ 浸水：水温は10℃以上を確保し12時間以上の浸水を行う。
- ・ 芽出し：必ず行う 最適温度13～18℃
- ・ 成長温度：13～28℃
- ・ 休養：ハウス内にて15～25℃の温度を確保する。30～40日を目安に行い内樹皮の腐朽を進める。



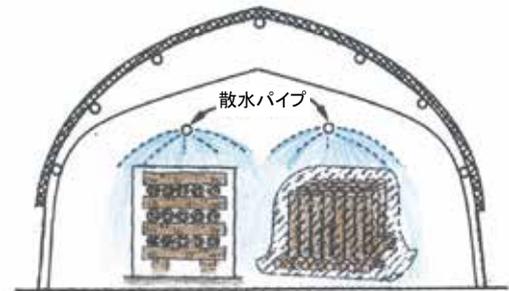
菌興537号2年ほだ木の発生

【夏菌（菌興 697 号）早期使用に向けての事前管理】

5月より安定発生のため、事前管理を行ってください。

5月発生の場合、12月上旬頃からハウスに取り込む方はハウス内で被覆管理し、取り込めない方は、裸地で冬囲いを行う。2月下旬～3月上旬より被覆を剥がし、散水を行う。

ハウス内に取り込む。密なイゲタ並びに束立てにして、ポリで被覆

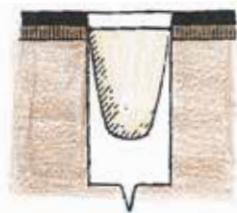


事前管理中の目安
樹皮にカラ芽がふき上がってきたら、順調に事前管理が行われていると確認できる。
カラ芽が軟化し、褐変したら使用開始とする。

3. ほだ木作り（植菌～仮伏せ）

良質のほだ木を作るためには、植菌～仮伏せ中の管理が重要となります。特に、近年異常気象の影響もあり害菌の発生も多く見受けられます。害菌の侵入防止のためにも適切な管理が必要となります。また、3月中旬以降は被覆内温度に注意し、20℃を超えるようになったら被覆を外して散水のみでの管理に切り替えます。

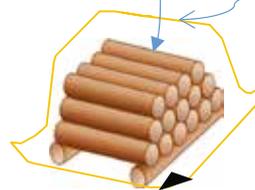
1	月	2	月	3	月
---	---	---	---	---	---



◎形成菌
穴の深さは25mmまでとする。
穴数は直径×4倍の数。
◎駒菌
穴の深さは30～40mm（深穴推奨）。穴数:直径×3倍

（仮伏せ初期）

被覆内温度:10～15℃

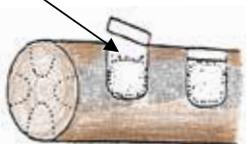


・遮光ネット
・麻袋・段ボール
・ほだ木コート

植菌終了後ほだ木に散水（10分程度）行うことで活着促進の効果大。

チェック

発菌を確認



植菌後、1～2週間で種菌からの発菌状態をチェックしてください。被覆内温度が上がっていない場合も、発菌が遅れて種菌部が乾きます。

【仮り伏せの事例】



露地栽培での稲わらを利用した仮り伏せ



ハウスでのビニール被覆による仮り伏せ

(関東・東北事務所 片庭将道)

..... 全国の向こう3カ月気象予報（2018年12月25日、気象庁発表）

1月 北日本日本海側では、平年と同様に曇りや雪の日が多いでしょう。東・西日本日本海側では、平年に比べ曇りや雪または雨の日が少ないでしょう。北・東・西日本太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、東日本で平年並または高い確率ともに40%、西日本で高い確率50%です。降水量は、東日本日本海側で平年並または少ない確率ともに40%です。

2月 北日本日本海側では、平年と同様に曇りや雪の日が多いでしょう。北日本太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。東・西日本日本海側では、平年に比べ曇りや雪または雨の日が少ないでしょう。東・西日本太平洋側では、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。気温は、東日本で平年並または高い確率ともに40%、西日本で高い確率50%です。降水量は、東日本日本海側で平年並または少ない確率ともに40%、東・西日本太平洋側で平年並または多い確率ともに40%です。

3月 北日本日本海側では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。北日本太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。東日本日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。東日本太平洋側と西日本では、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。気温は、東日本で平年並または高い確率ともに40%、西日本で高い確率50%です。降水量は、東日本太平洋側と西日本で平年並または多い確率ともに40%です。

全農乾シイタケ情報

全農椎茸事業所



1. 新春のごあいさつ

新年明けましておめでとうございます。平素から本会シイタケ事業につきましては特段のご協力を賜り厚く御礼申しあげます。昨年は豪雪、地震、豪雨、台風と災害の多い年となりました。1～2月にかけての平成30年豪雪では北陸地方を中心に大きな被害が発生しました。6月に発生した大阪府北部地震、9月の北海道胆振東部地震でも多くの方が被災しました。また、7月には平成30年7月豪雨により西日本を中心に多くの地域で河川が氾濫し、原木シイタケ生産者、施設にも大きな被害が発生しました。9月に日本へ上陸した台風21号では近畿地方を中心に大きな被害となりました。被災された方々に心よりお見舞い申しあげますとともに一日も早い復旧・復興をお祈りいたします。また、未だに多くの市町村で出荷制限・自粛がかかっている東日本産地においても、関係者の皆様のご尽力により少しずつではありますが、出荷解除となる生産者が増えてきており、本年はさらに多くの生産者が出荷可能となることを願っております。

2. 2019年度入札日程表および品評会について

この程、2019年度の入札日程を決定しました。入札情報等で周知のとおり、2019年度より日程表を電子化しました。全農ホームページに掲載しております。「全農」で検索し、事業概要→麦類農産事業→乾椎茸入札日程表です）までお願いします。デジタル化によりどこにいても確認することが出来るようになりましたので、確認をお願いします。

また、2019年の第52回品評会の展示表彰式は埼玉県久喜市にて開催します。日程は下記のとおり。

【品評会日程・場所】

- ・産地交流会：6月12日(水)夕方、さいたま市
- ・展示・表彰式典：6月13日(木)、久喜総合文化会館
- ・品評会特別入札会：6月14日(金)、全農椎茸事業所

※日程表については、下記アドレスからもご覧いただけます。

https://www.zennoh.or.jp/operation/sikumi_nousan.html#shiitake

3. 入札状況（品柄・出品数量等）

全農入札状況：12月5日に一般入札会（納会）を開催しました。年内最後の入札会とあって、年末年始必要な品柄へ積極的な買いが入りましたが、流通在庫も多いことから様子見的な展開となり、相場は保合となりました。保管状況により品質差が拡大しております。越年出荷される方は保管状況の確認を改めてお願いします。次回1月23日の初市は必ず開催しますので、全国からの出品をお待ちしております。

産地状況：12月10日に都内で、きのこなどの国産特産林産物を使った新メニュー・新商品コンテストの表彰式が開かれました。長野・鹿児島県の2JAと九州の乾シイタケ問屋が大賞を獲得しました。乾シイタケを使った商品では「山のだし茶漬け」が受賞し、栄養価が高い上に、お手軽さが受賞理由とのこと。現代のトレンドはやはり「手軽に楽しめる」ことが重要だと改めて気づかされました。我々も関係各所と協力し新たな需要創出を含めた努力を継続していきたいと思えます。

4. 乾シイタケ販売動向・一般情勢

贈答：12月のお歳暮需要は厳しい情勢ではありましたが、結果例年並み推移となりました。やはり、贈答需要の縮小は顕著で復調の兆しは無いようです。代わって、仏事等の需要においては引き続き堅調な販売が行われています。

家庭用・小袋：クリスマス明けから年末まで、一年間で最大の乾シイタケ需要期を迎え、昨年並みの底堅い販売を展開しています。また、増量等の売出しが増えるとともに、定番品に加え、スポット商品での展開が増えているのも昨今の情勢を反映しています。今後、2月の恵方巻、3月の桃の節句へ向けた売り込みが続いていきます。

業務・加工用：各種用途向けがありますが、量販店のバックヤード向け（惣菜）需要は堅調な売れ行きを示しており、中国産が多いのが現状ですが、生協やこだわりがある店舗では国産品が使用されており、消費に貢献しています。

輸出入：平成30年10月の輸出量は2.2tと昨年対比73.1%、10月の累計での輸出量は18.2tで昨年対比100%となっています。10月の輸入量は424tで、単価は1,230円でした。輸入量は昨年対比82.3%で、単価は同103.1%。10月の累計での輸入量は4,040tと昨年とほぼ同等の推移。

5. 事業所から

新年明けましておめでとうございます。

おせち料理では、たくさんの乾シイタケを食すことができました。原木乾シイタケの美味しさを改めて実感するとともに、この美味しさをいかに消費者へ伝達していくかが重要であると再認識しました。

気になる新聞記事がありました。「買い回りの傾向が強くなっている」との話です。買い回りとはドラッグストア、インターネット販売など安さを求め商品によって買物先を変える行動を指します。消費者の低価格志向は非常に根強く、買物場所がコンビニからスーパー、もっと安いドラッグストアに流れているとのこと。一方で、消費者はこだわりのモノやコトにお金をかけ、日用品などは低価格志向を貫く「メリハリ消費」が定着してきています。生活必需品である食品の業界にとっては厳しい現状ですが、選ばれる商品になることが重要です。厳しい情勢下ではありますが、乾シイタケが選ばれる商品になるよう、事業所一同関係各所と協力の上、精一杯努力してまいりますので、引き続きご支援・ご協力の程よろしく願いいたします。

6. 今後の全農椎茸事業所入札日程

1月：23日（初市）

2月：20日

3月：13日

全農乾シイタケ入札結果（平成30年12月）

（単位：円/kg）

月/日	区分	本数(箱)	高値	平均値
12/5	一般入札会（納会）	311	6,500	3,024
高値規格（出品JA）：大上厚（岩手県、JA新いわて）				

乾・生シイタケ輸出入実績（2018年10月時点）

乾シイタケの輸出実績（財務省貿易統計より）

	10月			1月～10月		
	数量 Kg	価額(千円)	単価(円 /Kg)	数量 Kg	価額(千円)	単価(円 /Kg)
中 国	0	0	0	0	0	0
台 湾	804	6,947	8,641	2,884	14,623	5,070
香 港	559	3,799	6,796	11,083	73,159	6,601
ベトナム	0	0	0	1,079	3,129	2,900
シンガポール	148	819	5,534	148	819	5,534
マレーシア	0	0	0	75	272	3,627
サウジアラビア	0	0	0	70	286	4,086
レバノン	0	0	0	32	219	6,844
オランダ	0	0	0	350	2,580	7,371
ベルギー	0	0	0	45	403	8,956
フランス	0	0	0	72	316	4,389
スイス	0	0	0	75	225	3,000
クロアチア	0	0	0	98	627	6,398
カナダ	0	0	0	30	219	7,300
アメリカ合衆国	698	3,476	4,980	1,961	8,870	4,523
オーストラリア	0	0	0	275	1,980	7,200
合 計	2,209	15,041	6,809	18,277	107,727	5,894
前年対比	73.1%	66.3%	90.7%	100.0%	93.0%	93.0%
前年実績	3,022	22,687	7,507	18,273	115,849	6,340

乾シイタケの輸入実績（財務省貿易統計より）

	10月			1月～10月		
	数量 Kg	価額(千円)	単価(円 /Kg)	数量 Kg	価額(千円)	単価(円 /Kg)
韓 国	0	0	0	1,366	3,096	2,266
中 国	424,192	521,889	1,230	4,033,267	4,872,494	1,208
台 湾	0	0	0	0	0	0
香 港	0	0	0	2,500	3,525	1,410
ベトナム	0	0	0	3,000	4,264	1,421
合 計	424,192	521,889	1,230	4,040,133	4,883,379	1,209
前年対比	82.3%	84.9%	103.1%	97.7%	97.3%	99.6%
前年実績	515,313	614,696	1,193	4,134,297	5,019,143	1,214

生シイタケの輸入実績（財務省貿易統計より）

	10月			1月～10月		
	数量 Kg	価額(千円)	単価(円 /Kg)	数量 Kg	価額(千円)	単価(円 /Kg)
韓 国	0	0	0	0	0	0
中 国	226,018	69,795	309	1,392,386	462,030	332
合 計	226,018	69,795	309	1,392,386	462,030	332
前年対比	152.6%	146.9%	96.2%	102.9%	101.7%	98.8%
前年実績	148,081	47,511	321	1,353,192	454,277	336

鳥取県産原木しいたけ 「とっとり115フェア」開催案内



多彩なジャンルの料理店で原木シイタケ115号の創作料理が楽しめる一か月限定企画「とっとり115フェア」が、今年も鳥取県内で開かれます。原木シイタケの魅力や美味しさを知る機会を提供して“シイタケファン”“きのこファン”を増やそうと、2016（平成28）年から始まった人気のフェアです。好評により回を重ねて今回で4回目。参加店舗も増え続け、今回は28店舗が参加します。

鳥取県では、「きのこ王国とっとり」の実現に向けて、生産者、関係団体、行政でつくる鳥取県原木しいたけブランド化促進協議会が“原木しいたけ115号のブランド化”を推進中で、「とっとり115フェア」もその一環です。県内の植菌数の7割を占めるシイタケ品種菌興115号をリーディングブランドとし、生産技術の向上、生産者の確保・育成、流通体制の構築、消費者へのPRなどに取り組み、原木シイタケ全体の生産量の増加や知名度の向上を目指しています。さらには菌興115号のブランド規格「鳥取茸王」や「とっとり115」を設けるなど、有利に販売できる取り組みを進めています。

【とっとり115フェアの概要】

期 間：2019年1月15日～2月15日

参 加 店 舗：鳥取県内28店舗（店舗名・ジャンルは次項のリストを参照）

メ ニ ュー：和食、洋食、麺、中華、カフェ等、幅広いジャンルの28店舗で鳥取県産食材とコラボした原木しいたけ料理をご提供♪

詳しくは、鳥取県庁のホームページで紹介しています。

「2019とっとり115フェア」で検索、またはQRコードからアクセス⇒



【美味しい情報その① スタンプラリー実施！】

フェア期間中、とっとり115のお料理を注文してスタンプを集めるスタンプラリーを行います。
スタンプ1つで応募資格をゲット！抽選で20名様に「原木しいたけとっとり115」や「鳥取県の逸品」（各10名様）など豪華景品が当たります。

スタンプを集めて2度美味しい！是非ご参加ください♪

【美味しい情報その② SNSで最新情報発信中！！】

Facebookページ「とっとり115フェア」にて最新情報を発信していますので、ぜひご確認ください。
とっとり115料理を召し上がった皆さんも楽しい写真をSNSで「#とっとり115フェア」、「#とっとり115」と発信して盛り上げていただけると嬉しいです♪

とっとり115フェア 参加店舗

店番	エリア	店舗名	所在地	ジャンル	電話	お店の紹介
1	東部	大江ノ郷ヴィレッジ テラス	八頭郡八頭町橋本877	洋食	0120-505-606	天美卵を使ったオムレツや地元野菜たっぷりのピュッフェメニューです。
2	東部	喫茶 ベニ屋	鳥取市末広温泉町151	カフェ・喫茶	0857-22-2874	ここでしか味わえないカレーをお出ししています。
3	東部	こおげの夢豆腐	八頭郡八頭町郡家578-13	洋食・その他	0858-71-0607	時に多国籍料理。地元ニーズに合わせ、ご要望に極力お応え！日本のジビエ20選。
4	東部	麺屋 玖	鳥取市正蓮寺107	中華	0857-20-2340	大山どりの鶏ガラを使った鶏清湯スープのラーメン屋です。
5	東部	ビアット・ドーロ	鳥取市弥生町183 ハッピービル2階	洋食	0857-29-4355	落ち着いたお店です。カウンター中心で、イタリアンが気軽に楽しめます。
6	東部	中華菜館 雷安	鳥取市富安1-153	中華	0857-25-4550	地元産を中心に県内外の信頼できる業者様より仕入れた食材を使用しています。
7	東部	そば 川口	鳥取市栄町204	和食	0857-30-5705	自家製粉石臼挽き手打蕎麦のお店です。
8	東部	カフェ・レストラン 仏区里屋	鳥取市湖山町北4-237-1	洋食	0857-28-1593	地元の野菜・お肉・魚にこだわり、素材を活かした料理をカジュアルにご提供。
9	東部	えびごGOHAN	鳥取市河原町牛戸3-2	カフェ・喫茶	0858-71-0073	里山の中、季節を感じる10種のおかずプレートや蒸しベーグルSETなどランチメニュー。
10	東部	梅乃井	鳥取市元魚町1-215	和食	0857-22-5383	鳥取県産の旬の恵みを楽しんで頂けるお店です。
11	東部	カフェ・ダール ミュゼ	鳥取市東町2丁目124 鳥取県立博物館内	洋食・カフェ	0857-20-2520	鳥取県産の食材にこだわって美味しく身体に良いメニュー作りを心掛けております。
12	東部	日本料理 淳	鳥取市永楽温泉町257	和食	0857-29-9054	素材を活かした会席料理を気軽に楽しんでいたいただけるお店です。
13	東部	四季彩 かしも	鳥取市弥生町215	和食	0857-26-2880	地産地消がモットーのお店。気軽に日本料理を楽しんでいただけます。
14	東部	ごきげん食堂	鳥取市河原町高福837 道の駅かわはら内	その他	0858-85-6200	旬の食材で幅広い世代の方に楽しんでもいただけるメニューを用意しています。
15	東部	しいたけ会館 対翠閣	鳥取市富安1-84	和食	0857-24-8471	名物「きのこ料理」、日本海の幸や旬の食材の会席料理、源泉100%の温泉が自慢。
16	東部	Cafe & Dining San	八頭郡八頭町見槻中154-2	カフェ	0858-72-3330	イチオシは鉄板で焼き上げるオリジナルメニューのグリルサンド！
17	東部	HOME 8823	八頭郡八頭町見槻中176-4	和食	0858-71-0291	世代を超えてワクワクできる地域の台所 ホームハヤブサです。
18	中部	味処 進	倉吉市上井町2-7-1	和食	0858-26-9366	山陰の海と山と大地の恵みをモットーに、笑顔の絶えないお店作りを目指しています。
19	中部	遊食空間 きらく	東伯郡三朝町三朝791-18	その他	0858-43-0043	鳥取の地酒や日本海の鮮魚がメインの60年続く創作居酒屋。ランチもやっています。
20	中部	葉膳食堂 めぐり	倉吉市関金町安歩81-1	和食・カフェ	0858-48-7788	地元の旬な食材を中心に、葉膳の考え方を使ってメニューを考え手作りしています。
21	中部	甘味処 亀の尾	倉吉市塚町3-100	和食・喫茶	0858-23-5161	昆布、かつお、煮干しの出汁で丸大豆醤油、純米料理酒、本格本みりんで調理したダシ汁。
22	中部	カフェ アチエリーノ	東伯郡湯梨浜町松崎619	洋食・カフェ	070-2367-1183	自家製や季節の食材にこだわった、目でも楽しいシェフ自慢の料理です。
23	西部	割烹 きさら	米子市四日市町38-3	和食	0859-30-4806	最高に美味しい割烹。
24	西部	鉄板ふくもと	米子市米原1454-9	洋食	0859-30-4964	和牛ステーキ中心の鉄板焼きのお店。丁寧に焼き上げたステーキと地元食材のお料理。
25	西部	RESTAURANT レンガ屋	米子市皆生新田2-5-12	洋食	0859-37-3721	手作りの味にこだわって35年。3世代にわたる常連客も多い洋食レストランです。
26	西部	味処 四季	日野郡日野町野田277-8	中華	0859-72-1586	四季折々の食材を活かした「ちゃんぽん」。30年間地元や近県で愛され続けています。
27	西部	日々の糧	米子市明治町197 ホテル真田2F	その他	0859-34-3773	100%植物性食材を使って体にやさしい料理を作っています。
28	西部	Bistro et Vin ブチ・トロケ	米子市茶町87	洋食	0859-22-0062	居心地の良い空間でフレンチをお楽しみください。

2019年度きのこと栽培担い手養成研修生を募集します

一般財団法人日本きのこセンター



【目的】

原木シイタケなどきのこの持続可能な環境保全・循環型栽培に意欲的に取り組む力量と識見を有する担い手および後継者、また、地域におけるリーダー的な技術指導者などの人材育成を図ることを目的とする。

【研修科目】

(1) 実習科目

・シイタケ原木栽培実習

原木伐採から植菌、ほだ木育成、発生操作、採取、乾燥、選別、経営、流通までのシイタケの栽培全般にわたる実践的技術と知識を習得

・その他のきのこ栽培実習

培地作成から植菌、培養および発生操作、採取、選別、流通までのきのこ栽培全般にわたる実践的技術と知識の習得

(2) 教科学習

きのこ総論、シイタケ原木栽培論、きのこ遺伝・育種学、きのこの栄養成分論、分類・生態論、きのこの害菌・害虫論、椎茸栽培経営と流通論など。

※研修終了後の進路等に合わせてカリキュラムを組むため、研修科目を変更することがあります。

【研修場所】 一般財団法人日本きのこセンター 菌茸研究所

【研修期間】 1年コース（2019年4月1日から2020年3月31日）

※原則1年ですが、相談に応じます。

【受入人数】 若干名（性別、年齢、学歴は不問）

【応募書類】

- ・履歴書
- ・作文（研修を希望するにあたり、800字程度）
- ・健康診断書

【応募期間】 2019年3月8日（金）まで（当日必着）

【選考】 面接ならびに書類審査による選考
（面接は順次実施予定）

【結果通知】 2019年3月下旬（応募者に対して文書にて通知する。）

【受講料】 1年コース 36万円

【その他費用】 個人負担
内訳は現地研修旅費（10万円程度）
実験、実習、教科書代（1万円程度）、作業に必要な装備等

【下宿など】

希望があれば、賃貸アパートについては斡旋する。

【資格授与】

研修修了者に「きのこ栽培専門技術員資格認定書」などを授与する。

【給付金制度】

1年コースの研修生(研修終了後農業経営を行い、就農時の年齢が満45歳未満の者)で、研修期間中に諸条件を満たす者には、全国農業会議所から「農業次世代人材投資資金」として年間150万円支給される制度有(要綱の改正等により、制度内容が変更する場合があります)。



研修希望の方は、まずは菌草研究所までご連絡ください。

お問い合わせ、応募先

一般財団法人日本きのこセンター

菌草研究所事務局 宛

〒689-1125 鳥取市古郡家211番地

TEL 0857-51-8111

FAX 0857-53-1986



石川ニュース



奥能登地域のブランド原木シイタケ「のとてまり」の出荷始まる

平成30年12月17日、穴水町JA全農石川穴水事務所の集荷場に生産者が持ち寄ったブランド原木シイタケの共同選別が行われました。昨年よりやや多い755枚が出荷され、最上級の「のとてまりプレミアム」には12枚、「のとてまり」には169枚が認定されました。翌日18日に金沢市中央卸売市場で初競りが行われ、「のとてまりプレミアム」一箱（6枚入）が過去最高の20万円で落札されました。

（北陸駐在 梶川祐太）



初競りの様子



20万円の値がついた
のとてまりプレミアム

【読者の皆さまへ】

明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしく申し上げます。

菌茸新春号（第65巻 1号 通巻760号）

発行日：2019年1月5日

発行：一般財団法人日本きのこセンター

鳥取県鳥取市富安1丁目84番地

☎ 0857-22-6161、<http://www.kinokonet.com/>

編集：菌茸編集委員会

記事、写真およびデータの無断転載を禁じます。